

県内文化

美術

野中 耕介

美術の様相―美術史

したが、約束された間をわたって、そんな磁場は30年もの間、かのごとく綿々と主流気概を持ち続けた作家たち集結して来た。今年表を続けてきた。しかきたことは周知の事実である。市立図書館では、同グループの創設者であり、昨年没した故・真子達夫の初期から晩年までの作品が並んだ。度問う直すべき時にき

美術の内容と方向性を決定付けるのは、つまりとこの表現と「人脈」の二つである。私は考えている。すなわち、誰が誰と関わり、どのような表現が生まれてきたか。それがどうに見つめてゆくかは、美術史の本質を知り、重要な手がかりになるのではないかと思うのだ(私が常々美術教育とその教師、指導者に代わるもののためである)。佐賀県の洋画の場が、おそろしく他のあらゆる「地方」と同様、明治以来もたらされた中央のアカデミズムの戦後は、日展系といふことばで人口に膾炙

「反逆児」たちの「磁場」

する作家が必ず現れてくる。この佐賀でもそうした「反逆児」たちが生まれ、常に美の境界を追求し、それを刷新してきた。かれらの存在は私たちに美に対するより深い思索をうながす。郷土の美術史に、この「事件」もい

「アートグループ磁場」は、結成以来30年

機であり、活動継続の意図があるのだから。(県立美術館学芸員)

文化時評

2009